学校法人　藤学園　藤幼稚園　　第24号

園長室の窓から

平成 25 年 4 月 26 日

子ども達が園生活により馴染めるように！

入園式・進級式から早や２週間余りが過ぎました。

個人差はあるものの、子ども達は少しずつ新しい園生活に慣れ、新しい友達もでき、戸外や室内で元気に遊ぶ声が聞かれるようになりました。

今が正念場。子ども達が園生活により馴染めるよう、園と家庭との連携を一層密にしていきたいと思います。

ご支援・ご協力の程、よろしくお願い致します。

教育雑感　シリーズ 24

~ガキ大将~

わたしの子どもの頃には、「ガキ大将」と呼ばれる子どもがいました。腕力が強く威張ってはいるものの義侠心に富んだ子どもです。このガキ大将についてジャーナリストの角間 隆さんが、ご自身が小学校の２年生の時に体験されたエピソードを書いています。とても興味を惹かれた内容だったので、その概要を紹介してみます。

「東京から金沢へ転校してきた女の子がいた。その子は成績も良く、色白でとてもきれいな子だったが、金沢弁が上手くしゃべれないこともあり、新しい学校の雰囲気になかなか溶け込めなかったようです。

ある寒い冬の日、その女の子が、おもらしをしてしまった。先生には、恥ずかしくて言い出せなかったようだ。隣の席に座っていたクラスで一番暴れん坊のガキ大将が、ふと横を見ると、女の子が下をびっしょり濡らして、今にも泣きだしそうな顔をしていた。

おもらしをしたと直感したガキ大将は、次の瞬間パッと立ち上がって、教室の後ろにある防火用水入りのバケツを抱えてきて、その水を女の子の頭からザァーッとぶっかけた。そのため、クラス中が大騒ぎになってしまった。先生は

烈火のごとく怒って、彼を夕方まで冷え込む廊下に立たせておいた。

女の子は、皆にいたわられながら早退していった。ガキ大将がぶっかけたバケツのお水が、辺り一面を大洪水にしてしまっているため、椅子の下に流れたおしっこのことには誰も気づかない。女の子の服もずぶぬれになっている。

『かわいそうにねぇ‥。風邪ひくといけないから、早く帰って着替えなさい。』と先生に優しく言われた時、彼女は思わず事の真相を打ち明けようと思ったが、気の弱い彼女には、それすらできなかったという。

彼女は、そのことをずっと気に病んでいたらしく、卒業式の日に皆の前で４年前に起こった事件のことを告白して、ガキ大将の男の子に深く詫びた。期せずして、クラスの中から割れるような拍手が巻き起こった。その時、ガキ大将は、照れくさそうに頭をかきながら『えへへ‥』と笑っているだけだった。」と。

このガキ大将の行為をどのように捉えるかは、読み手によって様々だと思いますが、私は、これまで日本があまり力を入れてこなかった「社会性」を育むことの大切さに改めて気づかされました。

ガキ大将のとった行為は、まさに咄嗟に出たものです。その瞬間的にとった行為の拠り所となったものは、一体何だったのでしょうか。

私が思うには、転校してきたばかりの気弱な女の子をただ守ってやりたい一心からだったのではないか。そこには損得勘定は微塵もない、いわゆる「強きを挫き、弱きを助ける」という小さなガキ大将なりの大義名分がそこに働いたのだろうと想像するのです。

それにしても、証拠隠滅ともいえる、防火用水入りのバケツの水を女の子の頭からぶっかけるといった大胆な発想は、大人でもなかなか思いつかないものです。しかも咄嗟にです。

いずれにしても、女の子に恥をかかせてはいけないという一途に思う心とともに、日頃からそうした行為に似たことを周りの大人達から学んでいなければ、出来ないのではないかと思うのです。なぜなら、そうした行為は、学校では教えてくれないからです。

ガキ大将のとった行為は、学校ではなく、当時の家庭や地域でこそ学べたことのように思います。当時の家庭や地域には、心意気のあるガキ大将を育てる土壌があったのでしょう。改めて、家庭や地域の教育の大切さを痛感したところです。

~幼児教育は「散歩」なり~

「幼児教育を一言で」と問われた時、どう答えるか。その問いに端的に答えられていた東京大学大学院の秋田喜代美先生のコメントを紹介します。

「幼児教育は、一人一人のペースに合わせた散歩です。“自分のペースで歩いた”という自信をつけたり、目的地への到着よりもその過程で様々な興味を持つことを大切にします。（今は殆ど使われることがなくなった「道草」が、まさに幼児教育の真髄ではないかと思います。）

ただし、こうした散歩にも地図は必要です。どのような方向に子どもが育ってほしいかという地図を保育者が持ち、子どものペースに合わせて導いていく必要があります。その意味では、保育者には、子どもの育ちを俯瞰的に見る“タカの目”、そして子どもに寄り添う“アリの目”の両方が必要だといえます。」

※ ＿＿＿線部分は、筆者の私の思いです。

さて、人の成長を一本の樹に例えますと幼児期は「根」を育てる時期に当たります。大きくたくましく育った「根」には、たくさんの葉が茂り、花が咲き、やがて大きな樹に成長します。

また、「親」という字は「立木を見る」と書きます。立木はどんどん大きくなります。その立木（=子ども）のてっぺんを見るには、親自身も立木との距離を徐々にあけつつ、立木と共に成長していく必要がります。

園生活の全てが、お子様の「根」を育てる大切なものになります。これは、生きる力の基礎となります。